

投稿

1

海老名の自由民権家、 今福 元穎 島口 健次

今福は天保14（1843）年、中新田に生まれた。同家は当時25町の田畑を持つ豪農であった。今福は県の官吏を経て、明治12（1879）年、県会議員となった。そしてこの県会議員時代に取り組んだ大イベントが、国会開設請願運動であった。いわゆる自に由民権運動は、国会開設、地租軽減、憲法制定の三大要求を掲げて開かれた日本最初の民主主義運動であったが、その開幕を告げる最初の大運動がこの明治12年の国会開設運動であった。明治13年2月、今福ら数名の議員は全力をあげて国会開設請願運動にとりかかったものである。この運動は民権派の郡長、戸長をまき込み、文字通りの草の根運動でもあった。海老名市域で運動を推進したのは、今福の外に石室利左衛門（下今泉）、大貫長太郎（粕ヶ谷）がいた。彼らは高座郡有志の“締盟書”に署名して奮闘を

誓った。

かくして僅か三ヶ月の間に、相州九郡五百五十九町村から二万三千名の署名を集めるといふ空前の成果をあげている。そしてこの大運動を指導した県議たちの中心にいたのが今福であった。6月5日、今福ら代表団は、福沢諭吉の筆になる建白書を、署名簿を携えて上京した。ところがその夜、宿舎で神奈川県令野村靖から使者を通じ、全員横浜に引き上げるよう命令を受けた。建白書の提出を明日に控えて、土壇場で県令の妨害に出会ったのである。

一行は今福と福井直吉（平塚）の二人だけ横浜に派遣し、他の総代は予定通り元老院に建白することにした。今福はその後県会議長となり、県政、市政でも活躍した。厚木歴史研究会では今福の功績について講演会でアピールしている。

投稿

2

秦野の自由民権家 栗原宣太郎 島口 健次

秦野の自由民権家に栗原宣太郎がいた。栗原は1864年秦野の白笹稻荷神社の社主の家に生まれた。白笹稻荷は養蚕、農業、火難、盗難の神と言われ、地方では格式の高い神社で、毎年2月の初午の祭りには数千人の参拝客がある。栗原家は代々同神社の神官を務めていた。少年期を迎えた栗原は、国文を大山阿夫利神社の神主である権田直助に学び、また漢文を藤沢羽鳥の小笠原東陽に学んだと言われる。権田と小笠原は当時の相州では代表的な碩学であった。権田は平田派国学という保守的な学者でありながら、山口左七郎（自由民権家、代議士湘南社代表、伊勢原）らの湘南社の民権家とも親交があり、当時思想的には対極にあった山口らに国学や和歌を教授するという開放

的な性格の持ち主であった。小笠原は藤沢の羽鳥で耕余塾を主宰し、相州地方の弟子の教育に当たっていた。このような恵まれた教育環境の中で良き師を得て栗原は、当時としては最高の教育を受けたわけである。栗原はその後東京に進学して、日本法律学校（今の日本大学）で、法律、政治、経済学を学んでいる。栗原はその後秦野村長、県会議員を経て、衆議院議員を務め、政界で大活躍をした。栗原は明治32年から35年まで県会議長をも務めている。一方栗原は衆議院時代、神社規則改革委員として神社制度の改善にも尽力している。栗原が代議士を退いたのはまだ44歳という働き盛りであったが、白笹稻荷神社の神職として神社界の発展に貢献している。